

## 柄谷行人「世界史の構造」論の考察

—福祉国家分析の視角としての可能性から—

○ 北星学園大学 伊藤 新一郎 (5419)

キーワード：交換様式・社会構成体・福祉国家

### 1. 研究目的

1990年代初め、かつてフランシス・フクヤマは「歴史の終焉」論を展開し、リベラルな民主主義が人類における統治の最終形態であり、「歴史の進化過程の終わり」を主張した。このような進化論的歴史観（あるいは発展史観）に依拠した見解は、福祉国家論にも見出せる。「福祉国家の危機」から30年以上が経過した今日においても、福祉国家は一つの規範的地位を占めているとみなせるであろう。それは、福祉をめぐる議論自体が、福祉概念の広義および狭義を問わず、福祉国家を暗黙のうちに所与の前提（必然）とするからであり、福祉国家は「福祉の歴史の終わり」としての意味を与えられているとも理解できる。

しかしながら、福祉国家は「福祉の歴史の終わり」なのであろうか。それはあまりに自明視されてきたからこそ、21世紀の現代において今後の針路を思考する場合、その歴史の意味が問い直される必要がある。その際重要なことは、福祉国家の歴史を見ることではなく、その成立以前との関係から世界史的構造の中に位置づけて再検討することである。

このように考える時、評論家・批評家である柄谷行人が近年における一連の著作の中で展開したいわゆる「世界史の構造」論（以下、「構造」論）は、福祉国家を捉える視角として興味深い議論である。人類の歴史（世界史）を「交換様式」の観点から捉え直した柄谷「構造」論は、福祉国家を新たな視角から捉え直すことに寄与する可能性がある。

以上を踏まえ、本研究では柄谷行人による「構造」論について、それがもつ福祉国家分析の視角としての可能性を念頭に考察する。

### 2. 研究の視点および方法

本研究は文献研究である。柄谷の「構造」論の中核である次の2点を研究の視点として設定するが、これは福祉国家分析の視角としても示唆的であると考えられる。第1に、柄谷が資本主義経済（社会）をその成立以前からの通史的な視点により位置づけるために提示した交換様式論という分析視角について概観し、その意図と意味を整理することである。

第2に、先の交換様式論における交換様式の種類の組み合わせで描き出される複数の社会構成体について概観し、それぞれの特徴を捉えることである。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針の内容を遵守する。

#### 4. 研究結果

柄谷「構造」論の概要は以下の通りである。まず、交換様式論である。柄谷によれば社会構成体をみる際、経済的下部構造と政治的上部構造というマルクスの理解は、近代資本主義社会を前提としており、資本制以前の社会に適用するとうまく説明ができないという問題点を指摘する。よって、柄谷は「生産様式＝経済的下部構造」という見方を放棄し、「生産様式」に代わり「交換様式」から出発する。柄谷「構造」論の核心はこれである。

柄谷の提示する交換様式は4つに分類され、それは交換様式A：共同体間に生じた「互酬（贈与と返礼）」、交換様式B：ある共同体が他の共同体を略取することから始まる「再分配（略取-再分配）」、交換様式C：相互の合意にもとづく「商品交換（貨幣と商品）」、交換様式D：まだ現実に存在していないが交換様式BとCによって抑圧された互酬性の契機を想像的かつ高次で回復しようとする「X」で、それは世界宗教として構想される。

次に、柄谷は前資本主義的な社会構成体を捉えるために「交換様式」からのアプローチし、マルクスに依拠した上で5つの社会構成体を提示した。それは基本的に3つの交換様式A・B・Cの接合であり、その仕方と濃淡が多様な社会構成体をもたらしている。それは、①「氏族的社會構成体」、②「アジア的社會構成体」、③「古典古代的社會構成体」、④「封建的社會構成体」、⑤「資本主義的社會構成体」の5つである。福祉国家はこの中で⑤「資本主義的社會構成体」に該当するものとして位置づけられる。

#### 5. 考察

柄谷「構造」論は、4つの交換様式を基盤として、その組み合わせにより5つの社会構成体を世界史の構造として描写する。その中で現代の先進諸国が「資本＝ネーション＝国家」の三位一体システムから構成されていることを示した。これらの視角は福祉国家分析をその射程に収める可能性を秘めている。福祉国家は柄谷による社会構成体の5類型で言えば、⑤「資本主義的社會構成体」であって、「資本＝ネーション＝ステート」という三位一体が最もうまく機能している姿といえる。福祉国家の社会民主主義モデルも、柄谷の議論からいえば、資本主義経済を超える（その弊害を解決する）ものでは決してなく、むしろ「資本＝ネーション＝国家が生き残り存続するための最後の形態」と位置づけられる。

柄谷「構造」論を踏まえると、福祉国家は世界システムの中で生じたもので一国内のみで成立しているわけではなく、それを一国内で揚棄することもありえない。それは、現在の世界秩序である主権-国民国家体制は各国家の「相互承認」によって成り立っており、容易に解体されるものではない。その意味で、福祉国家は国内的な基盤条件では成立しえず、対外的な関係（国際関係）においてその存在が浮き彫りになる相対的な存在といえよう。

本研究では、柄谷「構造」論の考察に主眼を置いたため、具体的な福祉国家分析の作業の前段階と位置づけられる。今後は、今回の考察を踏まえた福祉国家分析が課題となるが、今回提示した2つの視点以外にも「国家」「民主主義」といったキーワードが考えられる。